

令和6年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全14ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 悪意のある言い方。
- ② ご所望の品をお持ちいたしました。
- ③ 因果応報を信じて真面目に努力し続けた。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① 定時にタイキンする。
- ② ニンジンが食べられない。
- ③ 岩石をサイシユする。

問3 ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① □より育ち

ア 親 イ 土 ウ 氏 エ 生

② 一寸の虫にも□分の魂たましい

ア 一 イ 三 ウ 五 エ 七

問4 次の空らんには当てはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① 給料日の前日は、必ず懐が（ ）なる。

ア 弱く

イ 遅く

ウ 広く

エ 寂しく

② 貴重な資料を（ ）貸してくださった。

ア ここちよく

イ ころよく

ウ みばえよく

エ こきみよく

問5 ぼうせん部と意味・用法が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

私の書いた手紙を渡す。

ア 兄は、走るのが得意だ。

イ 満点の星空は美しい。

ウ 桜の咲く季節が来た。

エ この傘は誰のですか。

二

次の文章は、京都大学の教授である筆者による、SDGsに関する文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① ある年のSDGsに関するオープンラボでは、集まった学生たちに教員側から何かひとつクイズを出してから話を始めることになりました。そこで私が用意したのは、一枚の写真です。

私は二〇二一年四月から、静岡県立大学の副学長を務めています。その関係で県立農林環境専門職大学を訪れたときに、メロン栽培のビニールハウスを見学しました。京大の学生たちに見せたのは、そこで撮った写真です。

その写真では、メロンを栽培しているハウスの中に、ビニール製の筒が通路に沿って吊るしてあります。それが、ハウスの外にあるボイラーとながっている。「さて、これは何でしょう？」というわけです。

正解は、二酸化炭素ダクト。ボイラーから出る排ガスを、栽培しているメロンにたつぷりと与えているわけです。答えを聞いた学生たちは、みんな絶句していました。SDGsが始まる前から、地球温暖化や気候変動の元凶と目される二酸化炭素は、あたかも「毒」であるかのようなイメージを持たれています。SDGsでも「気候変動に具体的な対策を」が一三番目の目標として掲げられていますから、やはり嫌われる。なくすことばかり考えて、それを「使う」ことは思いつかないのでしょうか。

でも、二酸化炭素そのものはべつに毒ではありません。むしろ植物にとっては、光合成に不可欠な「ご馳走」です。そして、その光合成から排出される酸素が、私たちにとっては生きるのに欠かせない「ご馳走」になる。視野を狭めて、人間の都合だけで「脱炭素」ばかり考えていると、そういう自然界の大きな循環が見えませんか。

それに、地球の長い歴史を振り返れば、そもそも酸素のほうが生物にとって「猛毒」でした。というのも、最初の生命が誕生したとされる四〇億年前は、まだ大気中に酸素がほとんど含まれていなかった時代です。ところが、いまから二八億年ほど前にシアノバクテリアという生物が登場し、光合成を始めました。光エネルギーを使って水と空気中の二酸化炭素から炭水化物をつくるようになったのです。

その過程で吐き出される大量の酸素は、当時のほとんどの生物にとって毒ガスみたいなものだったでしょう。いきなり光合成なんか始めたシアノバクテリアは、いわばテロリストのようなもの。そのおかげで、多くの生物が絶滅したと考えられています。

しかし、やがてその酸素を「ごちそう」としてありがたいたく生物が登場しました。それが私たちの遠い祖先にほかなりません。チャールズ・ダーウィンが見抜いたとおり、生物は環境に合わせて進じます。変異によって環境に適合する形質を身につけた個体が、生き残って子孫を残す。ですから、生物全体のことを考えれば、環境に良いも悪いもありません。その時々で環境で生きやすい種が生き残るだけの話。酸素であれ二酸

化炭素であれ、場合によって毒にも栄養にもなるわけです。

学術の場である大学でSDGsに取り組むのなら、今日の前にある「脱炭素」という社会問題を考える前に、そういう広い視野を持ったほうがよいでしょう。それがないと、その取り組みは正義感ばかりが先走った社会運動のようなものに収斂^{※しゅうれん}しかねません。若い学生は「純粋^{じゆんすい}」なところがあがるゆえに、いったん「これが正義だ!」と思ひ込むと、そちらの方向に暴走しがち。しかし学生という立場で第一に取り組むべきは「X」ではなく「Y」です。

もちろん、学生たちがみんな正義感で突っ走ろうとするわけではありません。逆に、SDGsの活動をやってみた結果^③、そこにある矛盾^{むじゆん}に気づいて悩む学生もいます。

たとえば、SDGsの一番目の目標は「貧困をなくそう」というもの。このテーマを選んだ学生の中には、先進国と比べて経済的に貧しい開発途上国^{じやうこく}などに行つて現状を調べ、問題解決の道を探ろうとする人も少なくありません。

でも実際に現地へ行くと、想像していた状況^{じやうきやう}とは違う^{ちが}こともあります。現地の人々の暮らしを見ると、たしかに日本で暮らす自分たちよりもはるかに貧しいようではあるものの、思ったほど「不幸」には見えない。むしろ、現状に満足して楽しそうに生活しているように感じられることもあるでしょう。

感受性の鋭い若者ほど、そこで迷いが生じます。経済的な格差は小さくしなければいけないと思つていたけれど、それは自分たちの勝手な思い込みだったのかもしれない。SDGsの目標は、いわゆる西側先進国の価値観を途上国に押しつけているだけではないのか……というわけです。

これは、大変健全な迷いだと言えるでしょう。国連の総意で定められたものとはいえ、やはりSDGsには西側先進国の価値観が色濃^くく反映されていると私も思います。それを「グローバルな価値観」と呼ぶ人もいるかもしれませんが、たとえそうだとしても、何に幸せを感じるかは決して同じではありません。そこには、[※]ローカルな歴史や文化に基づく多様性があります。

ですから、日本人の学生が海外に行つて「自分たちと同じように豊かな生活をしてほしい」と言つても、もしかしたら向こうは「おまえたちみたいな暮らしはしたくない」と言うかもしれません。もちろん、誰^{だれ}がどう見ても改善すべき貧困は存在します。しかし、途上国と呼ばれる国のみんながみんな、欧米諸国や日本のような近代社会の生活を求めているわけではないでしょう。そもそも「途上国」という呼び方自体が、^④先進国側の思い込みかもしれない。そう位置づけられている国々が、みんな「先進国」に追いつこうとしているとはかぎらないのです。

海外の現地でそういうローカル性や多様性に気づき、頭の中でSDGsの価値観が絶対的ではなくなった学生の中には、日本に帰国するとSDGsの活動から離れて哲学的思考^{てつがく}を始める人もいます。それはまったく「失敗」ではありません。何かをやってみて新しい発見があれば、どんどん方向

転換をすればいいのです。

そこで大切なのは、迷いの生じた学生の受け皿を用意しておくこと。SDGsの達成を絶対的な目標に据えてしまうと、それこそ硬直した社会運動のようになってしまい、そこから抜けることに罪悪感を抱くようになるかもしれません。疑問を感じたらいつでも別の道へ進めるようにしておくべきでしょう。

ちなみにいま大学では、キャンパス内で学生を勧誘するカルト団体[※]が、SDGs関係のセミナーなどを装うケースがあることも問題視され、注意喚起がなされています。そういうことの「入口」として利用されるぐらい、SDGsには真面目で純粋な若者の正義感を刺激しやすい面があるわけです。

（酒井敏『カオスなSDGs―ぐるっと回せばうんこ色』）

※SDGs……二〇一九年九月二十五日の国連総会で決定された「持続可能な開発目標」。環境問題・差別・貧困・人権問題といった十七個の課題が
しめされた。

※オープンラボ……研究室（ラボ）のかべをなくし、ひとつの大きな部屋に集まって交流しながら研究をする形式のこと。

※収斂……ものが一つの所にあつまること。

※ローカル……その地方に限定される特有なこと。また、そのさま。

※カルト団体……特定の宗教や人物・教えを熱狂的に信じる人たちの集まり。

問1 ぼうせん部①「そこで私が用意したのは、一枚の写真です」とあるが、筆者のこの行動の目的として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア オープンラボに集まった学生に対して、写真をつかったクイズを出すことで緊張をほぐしてあげるため。
- イ 学生にとって衝撃的な内容の写真を用意することで、SDGsに対して真剣な気持ちになってもらうため。
- ウ はじめに学生たちの思い込みをくつがえす事例を紹介することで、広い視野を持つことの大切さを伝えるため。
- エ SDGsという大きなテーマについて学ぼうとする学生に、彼らが勉強不足だということを最初に痛感させるため。

問2 ぼうせん部②「テロリストのようなもの」とあるが、なぜこのようにいえるか。本文中の言葉を使って、四十字以内で説明しなさい。

問3 空らん 、 にあてはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X－運動 Y－学問
- イ X－正義 Y－正解
- ウ X－暴走 Y－学術
- エ X－研究 Y－大学

問4 ぼうせん部③「そこにある矛盾」とあるが、この「矛盾」の原因について説明した次の文章の空らん ・ に当てはまる表現を、これよりあとの本文中から指定の字数で探し、それぞれぬき出して答えなさい。

SDGsの目標は、「グローバルな価値観」に基づくものだと考える人も多いが、実際にはそれは (九字) に基づくものであり、これに対して (十七字) が世の中にはあるため、すべての人々に受け入れられるものではないから。

問5 ぼうせん部④「先進国側の思い込み」について、ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近代的な暮らしをできていない国は、すべて「途上国」という位置づけにある。
- イ 貧しい国の人たちは、欧米諸国のような暮らしをしたいと考えているはずだ。
- ウ どの国もかならず発展して、先進的な暮らしができるようになるべきだ。
- エ 世界中のすべての人が、貧困に苦しまず自分らしく生きる権利を持っている。

問6 この本文を通して筆者が読者に伝えたいことはどのようなことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア SDGsを学ぶ中で悩みをかかえた学生は、自分の考えを決して変えることなく強い意志を持って研究にはげむべきである。
- イ SDGsの研究の中で疑問を感じた学生は、時には自分の考えを変えたり他の分野に挑戦ちようせんしていったりしてかまわない。
- ウ 若者の正義感やカルト団体などに利用されやすいため、学生たちはSDGsの活動からはできるだけ距離きよりをおいたほうがいい。
- エ 学生たちが迷いをかかえてしまったら、周囲の人々はその疑問を解決すべくできるかぎりのサポートをしなければならぬ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

太平洋戦争末期、「私」は飢える子どもを救うために、「タチバナ機械工業」を開業する。周囲には自動車の部品を製造するといつわり、「私」の考えを理解してもらえぬ人を探していた。「タチバナ機械工業」で働く職工は「私」の考えを知らない。

それから幾日か、ちんたらと生産する日が続きました。職工さんは相変わらず遅刻してやってきては、昼過ぎまではまともに作業しません。ツタ代さんは私が職工のことをなにもわかっていないと言いましたけれど、機械の前で舟を漕いでいる職工さんたちのうしろ姿を見ただけで、わかろうとする気も失せてしまいます。命がけで働いてきた男たちには、到底見えないのです。

理事長に言われた通りの生産高は、とても無理やな。ああ、開所のしよっぱなから、この始末や。

おそらく、「京都から来たお嬢さんやけ、しきらんやっちゃ」と、理事長からも、あのガマのような事務長からも笑われるのでしよう。そして、仕事を減らされていくのです。私は頭をかきむしりながら、理事長への言い訳を考えはじめていたのでした。

お昼が過ぎて、信次さんが「ぼちぼちやるか」と欠伸をしながら作業場に向かうのを見送り、ひとりブツブツ文句をこぼしながら伝票を帳面に転記していると、遠山さんという中年の職工さんが事務室にやってきました。

「どうしたん？」

「オレの旋盤が、動かん」

遠山さんは手慣れた旋盤でないといやだからと、自分の卓上旋盤をわざわざ運び込んできて小物の面削りなどの作業をしていました。七人の中では、いちばんまともに働く人です。まあ、七人の中ではですけれど。

見に行ってみると、遠山さんを除いた六人が旋盤を取り囲んで、ぼんやりと眺めていました。彼らに割り込んで遠山さんの旋盤を覗き込むと、焦げた匂いが立ち込めていました。これは間違いなく、中の電動機が焼けたのです。寿命がきたのでしょうか。

「遠山さん、これはすぐには直らへんのと違いますか。奥にある別の旋盤で作業してもらえまへんやろか」

遠山さんは口をとんがらせて「オレはこの旋盤やないとしきらんけ、それやったら帰る」と、駄々をこねたのでした。

「これは、つまらん。直しきらんけ、もう帰るい」信次さんが、面白がって笑いました。

「なに言うてるのん、今日帰ったかて、明日ひとりで直るもんやないで。違う旋盤でやってみてください、やるだけやってみてもええやろ」

遠山さんは、返事もしてくれません。

「じゃあない、誰か工具箱持ってきてや」

私がそう言うと、みんな怪訝な顔をしましたけれど、年配の職工さんが重たい工具箱を運んできてくれました。外装のボルトをはずして、電動機あたりに開けてみると、すっかり焦げたような色がついていました。まだ新しい焦げです。さわってみると、もう熱くはありませんでした。お昼休みの間に冷めたのでしょうか。私は鉄でケーブルを擱んで抜き、真つ黒焦げの電動機を取りはずしました。

「電動機が古うて電気が漏れたんや、それで熱なつて焦げたんやね」

職工たちは「X」で、焦げた電動機を覗き込んでいました。私は信次さんに、奥から別の旋盤機を持ってくるように言いました。

「あんた、まさか直せると？」

目を丸くする信次さんの顔を見て、私は、閃き④ひらめにまかせて言いました。

「直してもええけどな、条件がある」

「条件ち、なんね」

「仕事が終わったらな、私も玉野やさんでお酒飲みたいねん。連れてつてえや」

職人たちは顔を見合わせて首をかしげましたけれど、信次さんは愉快ゆめそうに笑いました。

「おう、連れて行くわ」

「ほんまやね、嘘うそやつたら承知せえへんよ」

「おう、男に二言はないけ」

そう言つて信次さんが旋盤を運び込んでくると、私は中を開け、同じように電動機を取りはずしました。電動機を固定するねじ穴の位置はぴったり合っているものの、そのねじ穴を設けるためのハネが少し大きくて、遠山さんの旋盤にうまく嵌はまりません。

「誰か、このハネを削つたつて」

職工のひとりが簡単に削つてくれました。嵌め込んでねじを止め、ケーブルをつなぐと、今度は電動機に差し込む回転軸じくの軸棒が小さくて合いません。もう一度ねじをはずして信次さんに渡し、「この軸棒を差し込む穴が大きいんや。まっすぐ回るようにできますか」と訊ねると、信次さんは「まかせえ」と言つて受け取り、見事に取りつけてくれたのです。

「うわあ、さすがやな！」思わずそう叫ぶと、信次さんはちよつと照れたような顔になつて電動機を渡してくれました。それをまた旋盤に嵌め込

み、ケーブルを差して、焦げをきれいにして油を注しました。遠山さんの旋盤は、見事に生き返ったのです。八人で歓声を上げたのです。

「あんた、どこでそばなこと習ったんや」

「機械いじりやったら男に負けへん、日本製鉄の上官になれるわ」

「オイの壊れたラジオも直せるんか」

「朝飯前や、持ってきて」

工場の空気が、そこでガラリと変わりました。なんだかみんな、楽しそうに作業しはじめたのです。やる気になった信次さんの、作業の早いこと。口をあんぐり開けて見ているほかはありませんでした。

「⑤ なんか、みんなえらい単細胞やな。」

半分呆れてはいましたけれど、それでもじんわりと涙があふれてきました。自分のもとで働いてくれる人がいる嬉しさ、その背中のおもしろさ。それを、初めて教えてもらった気がしました。そう、私も職工さんと少しも変わらない、まさに単細胞だったのです。

日の暮れる頃、職工さんたちと連れだつて八人で、玉野やさんに向かいました。

「飲みきらんやろ」と何度も言われた酒ですが、飲んでみなければわかりません。私は、すっかり覚悟を決めていました。職工さんが酒を酌み交わして打ち解けるのならば、私もしてやろうと思つたのです。

いつもの顔ぶれに女の私が入っていること、酌婦たちは面白くない顔をしました。けれどツタ代さんはほくそ笑むような顔で、私のコップに一升瓶からお酒を注いでくれました。

「ほんに飲みよる」

「うわあー」

男たちの声を聞きながら、まずは半分飲み干しました。

「まずくはないなあ」

そう私が言うと、職工たちは「イケるクチか！」と笑い、次々とコップを突き合わせたのでした。若い頃の女遍歴やら、あちこちの工場で喧嘩した武勇伝などを楽しそうに話す職工さんと肩をぶつかけながら、たちまちコップを空にしてしまいました。「弱いほうやないんやね」とツタ代さんに言われましたけれど、きつとそうなのでしょう。お酒で不思議やな、と思いました。普段は我慢して口に出せないことを、すらすら言ってしまうのです。

「信次さん、あんた、なんでもうちよつと真面目にせえへんの？ 折角頭がええのに、カビ生えるで」

信次さんは馬のような歯を見せて笑い、「オレは戦車のフタ造るのが好きやけ、細いのはしきらんちゃ」と言いました。

「戦車のフタやなんて、戦争してる間だけですやろ。終わったらどないするん」私は声をひそめて「戦争な、もう長くは続かへんで。日本は負けるんや」と言いました。こんなこと、滅多に口にはできないのですが、お酒の力です。

「なん言いよん」職工のひとりが戸惑ったように言いました。

「ほんまやで。ドイツが無条件降伏したんや。なんやの、新聞読んでへんの？ 日本は東洋の要、ドイツは欧州の要やったんや。ドイツが降伏したんやったら、ソ連かて満洲や日本に攻め込んでくるで。支那かて、そうや。アメリカとイギリスとソ連と支那が手を組んで、日本だけで勝てると思う？ 東京も大阪も名古屋も焼かれた、日本が勝つてたら、そんなんされるわけないやろ。もうすでに負けてますねん、その上、味方のドイツが降参してもたんやで」

職工さんたちは、ぽかんと口を開けて聞いていました。毎日明け方まで飲んでいては、新聞など読んでいるはずありません。戦局についてもなにも知らなかったのでしょうか。

「やつぱり、大阪の学校の先生ち、頭のデキが違うわ」遠山さんが、そうつぶやきました。私は声をひそめたまま、職工さんに語ったのでした。

※「戦争終わったらな、もう戦車のフタなんか、よお造られへんで。自分ら、大阪や東京の様子知らへんやろ。とにかく鉄がないんや、鍋も洗面器も供出させられてますねん。当面、造るのはそんなもんばかりやで。大量に造らなあかんねん。そしたら信次さん、どうするん。戦車のフタしか造られへんのやつたら、ぼいと捨てられるで、それが職工の世界なんですやろ」

信次さんは、眉をぎゅつとして頷いていました。

「信次さんは頭のええ人や、なんでもできますやろ。ようけ技術磨いたらな、それを教えてお金にすることかてできるんやで。自分でせんでも、指導して監督するんを仕事にできるんや。どう？ 戦争終わるんが、楽しみなってくるやろ。みんなも、そうやで。時代はこれから変わる、ひとりひとり可能性がある、その気になったら、日本製鉄の上官みたいになれるんや。いま、うちの工場はちっぽけでもな、新しい技術を身につけていこ。そしたらみんな、ただの職工で終わらへんで」

半分以上は、お酒が言わせた言葉でした。でも、そんな話を、職工さんたちは目を輝かせて聞いたのです。

「よし、もう一杯飲もうや！」

信次さんが威勢のいい声でそう言うと、私と職工さん全員が奇声を発しながらコップを突き合わせたのでした。

※舟を漕いでいる……「いねむりをしている」という意味。

※しきらん……「できない」という意味の方言。

※旋盤……工作物を切ったりけずったりするのに使うもの。

※つまらん……「いけない・だめ」という意味の方言。

※怪訝……あやしみいぶかること。不思議に思うこと。

※鉋……はさみのような形状で、物をつかんだり、つかんだものを曲げたりするのに使うもの。

※ハネ……水車やタービンなどの回転するものを周囲に取り付けられた金属片^{へん}。

※酌婦……料理屋でお酒をお客さんにつぐなどしておもてなしをする女性（スタッフ）。

※供出……国などの要請^{ようせい}によって物資をさし出すこと。

問1 ぼうせん部①「理事長への言い訳」とあるが、言い訳を考えているのはなぜか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 職工とケンカをしたことで生産高が悪いことを悟^{さと}られないようにするため。

イ 職工とうまく仕事ができていることを気づかれないようにするため。

ウ 理事長の予想通りに仕事が進んでいることをよく思っていないかったため。

エ 生産高が悪いことを理事長に気づかれる前に職工をやる気にさせようとしたため。

問2 ぼうせん部②「ぼんやりと眺めていました」とあるが、どのような状態か。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 職工仲間がこまっているが、何をしたらいいかわからないでいる状態。

イ 職工仲間が大した意味もなく集まり、野次馬^{やじうま}のようになっている状態。

ウ 職工仲間がそれぞれの仕事を終え、休憩^{きゅうけい}の合間に様子をうかがっている状態。

エ 職工仲間が仕事をしないでいる状況^{じょうきょう}を、うらやましそうにしている状態。

問7 ぼうせん部⑦「眉をぎゅっとして」とあるが、これはどのような気持ちの表れか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」が話している内容を理解することができず、それでも考えなければならぬことだと雰囲気から悟り焦っている。
- イ 「私」が話す内容は想定外のことであったが、職工の理屈を引き合いに出され、自身が置かれた状況の深刻さに困っている。
- ウ 「私」が声をひそめている様子から、他の人に聞かれてはいけない話であることを理解し、対応の仕方に戸惑っている。
- エ 「私」が職工たちの将来を案じている話を聞き、何も考えていない自分が恥ずかしくなり、どうしたらいいか悩んでいる。

問8 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 工場の経営者として自信をなくしていた「私」が、重要な出来事を経験する中で職工たちと心を通じ合わせていく様子が描かれている。
- イ 戦争時代の中で仕事にやる気を見出せなかった「私」が、職工たちの技術の高さを知ることと感化されていく様子が描かれている。
- ウ 工場の経営に必死になつて取り組んでいた「私」が、自らの実力を見せることで職工たちの協力を得られていく様子が描かれている。
- エ 高圧的に仕事をしていた「私」が、お酒の力を借りて職工たちと意見をぶつけ合うことで、彼らと打ち解けていく様子が描かれている。

問9 二重ぼうせん部「私と職工さんくでした」とあるが、本文中の「私」は職工との関係を変化させることができた。ここに至るまでに「私」はいろいろな働きかけをしていたが、あなたが最も評価する行動は何か。以下の条件をふまえて書きなさい。

【条件1】本文中の「私」の行動を具体的に書くこと。

【条件2】条件1で書いた行動によって起きた変化を根拠にして書くこと。(一文でなくてよい)

以下余白

—